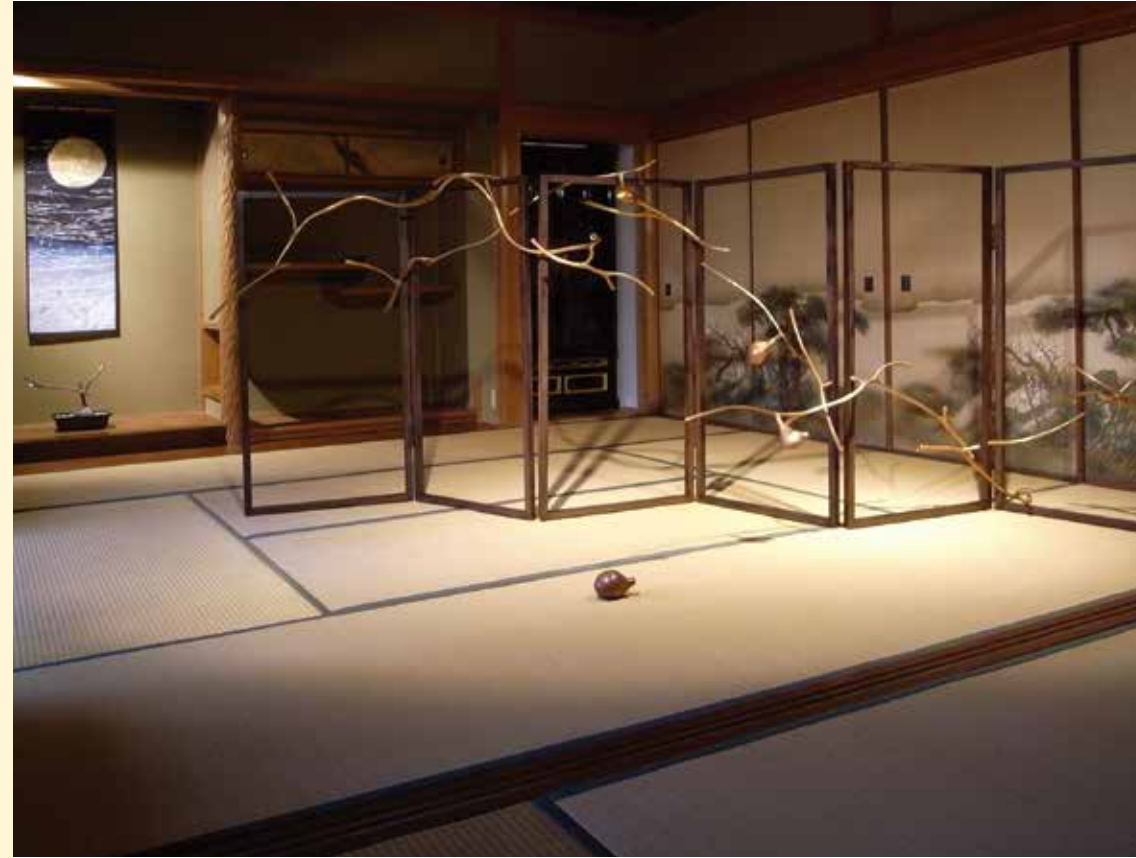




かくい てい
角井邸 ■ 鹿背山エリア

鹿背山（かせやま）分校の近くに「鹿背山城（かせやまじょう）跡」「西念寺」と彫られた二つの石碑と古い灯籠がある。鹿背山城はその昔、興福寺が築き、16世紀後半には戦国武将・松永久秀が再整備したとされる山城（やまじろ）で、角井邸はその登り口に建つ旧家である。石組みの外構をゆっくり上がっていくと、前庭と座敷が左手にあり、この縁側から向いの漆喰の白い蔵や古い屋根瓦などが借景のように優しく目に映る。このごく一般的な日本家屋に作品が加わることで、特別な空間が生まれた。



屏風とは、本来間仕切りとして、目隠しや風を塞ぐ為に用いられています。今生きる人と人の境界に屏風を置き、目には見えない意識や感情の枝と果実をつたわせました。人と人の中でぶつかり、合わさる人々の意識・無意識の壁。その空間には目には見えない意識の枝が絶えず伸びているのです。「枝と果実」は私の中で、枝≡血管、果実≡心臓・臓器という二つのイメージが存在しています。それは、体内の血管の形状、例えば樹木の葉脈や、更に大きくなって河川の水脈、人工物では満遍なく整備された道路網にも繋がる一つの大きな流れでもあります。ブロンズ鑄造。



冬の寒空に二つの月が浮かぶ夢を見た。現実にはあり得ない現象だが、何故かとても印象深い光景で頭の片隅にずっと残っていた。西アフリカでは双子はとても特別な存在とされ、その魔力にあやかろうと一対の木彫りの人形を掘る習慣がある。自然界において二つと同じ物はない中、本来一つであろう物が分裂したことに神秘を感じるのだろうか。華やかな金の月と穏やかな銀の月。見る者、季節、気温、場所によって異なって見える月が二つ存在するかもしれない世界。月をくす玉に見立て、通り抜ける者を不可思議な世界へと誘いたい。藍染、シルクオーガンジー、金銀箔。



アトリエやま ■ 鹿背山エリア

昭和42年、彫刻家・故水島弘一氏がここ南谷にアトリエを建設。山全体の敷地には、現在彫刻家水島石根（いわね）氏・太郎氏と美術鋳造家水島直春氏のお住まいのほか、乾漆工房、陶芸工房、登り窯、美術鋳造工場などがある。北に木津川が流れ、南方に春日山を臨み、眼下に柿畑を眺めるパノラマは壮観。四季折々の花や、たわわに実った果樹の中に彫刻が展示され、まさに桃源郷のよう。訪れた人々は、誰もが懐かしさと安らぎに満たされていく。かつては入江泰吉・杉本健吉・須田剋太などが集まるサロンであり、今も「土の会」として多くの芸術家が育って活躍している。魅力的なアトリエである。



日常の中にある何気ない物や風景をモチーフに制作しています。例えば水たまり。沢山のイメージを映し出し存在している、虚像であり実像でもある光景。

色彩の重なり、絵の具の量や質の違いによって生まれるイリュージョンにより人がモノをどのように見て感じ、選び取るのか。

私の移り住んだ自然豊かなこの町でも、ここ数年でガラッと景色が変わったとよく耳にします。今見ているこの景色は、数年後にはどうなってしまうのか不安になります。物理的に流れる時間と自身の感じている時間や距離の差異を認めながら、絵画を通して見えないものに触れてみたい。



薄絹の軽やかな布を制作しています。透過性のある布は一枚だけでも魅力的に感じますが、重ねずらすことにより一重では見えなかった多彩な新しい色や形が生まれます。一枚一枚の布はそれぞれに主張をし、他の布との微妙な緊張感を保ちながら、光の力を借りてその表情を変えていきます。素材をみつめ、透過と陰翳を意識しながら、私の中の精神的な世界を表現していきたいと思っています。



木津川を散策して出会った一つひとつの小さな痕跡。目立つものではないがそこにあるからこそ感じられる時間の流れ、いぶき。しかしそれは過去の物だけでなく、私達の一つひとつも未来に繋がっていく痕跡という事ではないか。



自分自身がこの木津川で育った事を一つの作品として残したいと思ったのが「inside」創作のきっかけでした。これから先どんなに時間が経っても、私にとって木津川は大事な場所で、帰って来たい私の内側の大事な場所であり続けてほしいです。



か せ やま
鹿背山ベースキャンプ ■ 鹿背山エリア

里山再生の活動拠点として、森の中に広場やデッキをつくった場所。鹿背山元気プロジェクトのみなさんが、休日などを利用してワークショップや、柿畑、ため池の再生などのサブ活動をおこないながら、自然とふれ合うことの楽しさすばらしさを伝えている。木津川アートでも作家を魅了。水面が黒く反射する池、竹林を切り倒した空間、アップダウンのある山道、倒れた巨木などを活かした、そこでしかできないアート「サイトスペシフィックな作品」やパフォーマンスが生まれた。



“石材にDrawing直彫りの手法で制作された作品。
これを空間の特性に従って構成配置することにより、
視覚をひきつけ拡散させながらゆるやかな磁場の形成を試みる。”



となりのがいこく やままつり
目できくおと 耳でみるかたち
思い出すみらい 降り積もるきおく
そうぞうする物語



場所からインスピレーションを得て、今回の作品を作りました。また、木津川市のことを聞かせていただき、変革のときを迎えていることを知りました。作品で強い生命力や、可能性、さなぎから蝶へ変わっていくような前向きな予兆のようなものを表現できればと思います。開催期間中に、さなぎの内側に赤い絵の具を用いて、作品に変化を与えました。



意識の中に存在する固定概念。それを覆された風景を目にしたとき、新たな意識と希望が生まれる。
 ベースキャンプの池に家具を浮かべた。
 木漏れ日が差す静かなため池の中にゆらゆらと白鳥のように優雅に浮かぶ家具。非常識であり、絵画のような空間を作ることによって、それぞれの持つ世界観を広げたい。



木津川の里山「鹿背山」のベースキャンプ周辺でピクニックをしつつ、「ここでダンスを創作したらどうなるか？」映画で言えば『ロケーション・ハンティング』。ロケハンをしつつ実際自然の中で踊ってみるワークショップです。里山の豊かな自然と触れ合いながら、ここでしかできないダンスを一緒に探しました。
 自然に興味のある方、サイトスペシフィック・アートに興味のある方、映像や演劇に興味のある方、もちろんダンスに興味のある方等が集まりました。

(コーディネート：NPO法人JCDN)



か せ やま ろ く ざん
鹿背山不動・鹿山文庫 ■ 鹿背山エリア

巨大な花崗岩の石不動（いわふどう）は圧巻だ。山頂の岩を基盤に仙人が碁を打っていたとか、その横の「しょんべんたれ地蔵」に参れば夜尿症に効くなど、ユニークな言い伝えとはうらはらに、威厳のある空気が流れている。ここは鹿背山のパワースポット？ 本尊の不動明王には1334年（鎌倉時代後期）の刻銘あり。歴史ある場所での現代アートは観る人を感わらせ唸らせた。同じ敷地内に建つ鹿山文庫は、西念寺の田辺和尚がつくられた私設図書館。地域の子どもや人々が集う場所でもある。



ヨーグルトとプリントされたブラッチックの四角いやつにくっ付いた、日本海近くで食われたカニのお腹。それを囲むように鉢状に集積された小枝。小型の飛び出し人形。くぼみにギャル二人の絵画。岩肌には備前のカキの殻とグラスのなかで重なり合うハブラシ。伝説と信仰と偶像と、もっといろいろ。

小枝のところに小さな鳥が遊びにきてるようです。ようこそ。近くにはケビン・ベーコン似の犬もいますよ。





透明水彩で描いた鹿背山（かせやま）の風景コレクションです。ここには見事な里山風景が残っています。それは人が大切に育ててきた風景です。この里山を歩き回って、気に入った風景を、はがきサイズのワトソン紙40枚に描き留めました。スケッチの1枚ずつに短いコメントをつけて、絵本のように展示しました。会期中、この40枚を使ったスライド会を上映し、里山風景を紙芝居のように読み解きました。



大仏鉄道 遺構付近 ■ 鹿背山エリア

明治31年4月開通、加茂と奈良を結ぶ約10kmの鉄道。名古屋・伊賀方面からの大仏詣客を運ぶためのものだったので、通称「大仏鉄道」と呼ばれていた。ユニークな名前と、たった9年間で廃線になった幻の鉄道ということで、わずかに残る赤レンガ遺構を巡るツアーは、今人気の一つである。イギリス製の赤い小さな蒸気機関車が、稲穂垂れる田んぼの中を走る姿を想像すれば、遠くに汽笛が聞こえてきそうだ。今回作品の展示をした「梶ヶ谷隧道（かじがたにずいどう）」と「赤橋」付近の休耕田は、木津中央地区開発のため京都大学農学部用地の予定となる。大仏鉄道遺構を取りまく環境は大きく変わるが、記憶の中にこの風景をいつまでもとどめておきたい。



風にそよぐ金色の稲穂、縦横無尽に空を舞うオオタカ、闇夜を照らす蛍の群れ一。かつてトンネルの向こうにあった鹿背山の原風景です。今、都市計画に基づく宅地開発が進むにつれ、トンネルのアーチをキャンバスに見立て、「田舎の名画」を鑑賞した思い出が消え去ろうとしています。私たちは資本主義が生み出す「豊かさ」を享受しようと、限りある資源をくいつぶしもがき続けています。日常に埋もれた「豊かさ」の本質を見失いながら。生物多様性の保全について世界的な協議が行われる中、開発の手が緩む気配はありません。断頭台のアーチをのぞき、鹿背山の未来に思いをめぐらせて下さい。（高さ6.5m）



大仏鉄道遺構付近は約110年前、隣町と観光地を新しい鉄道で結ぶために開発された。遺構トンネルは線路下を人が通るために作られ、その周辺の農地は鉄道開通前と変わらず耕され続けた。しかし私がこの地と出会う1年前、トンネルを境に農地の一部は耕作を停止し、私が訪れた2010年春、田圃には稲の代わりに背の高い雑草が生い茂っていた。私はこの土地が人と関わっていた時の姿を一目見たくなり、雑草を刈り取り、幼少期の記憶を頼りに稲掛けを作ってみた。畦道を取り戻したその風景は、見覚えのある風景に似ていた。

2011年、この土地は新たに開発され、新しい住人を迎えるそうである。



梅谷公民館 ■ 鹿背山エリア

木造平屋建ての小さな公民館は、昔梅谷にあった小学校の廃材を利用して造られたという。なるほど、分校かなと思わせる雰囲気がある。自治区で協議をされて、使用許可をいただいた。掃除をしていると昔の梅谷の地図が出てきた。ほとんど畑と山の記号しかなく、近年の環境の変わりように改めて驚いた。この時代、昔の面影を残す公民館の存在は大きいのではないか。かなり傷みが激しくなり、すでに別の場所に新しい公民館が建設されるということである。この建物の行く末が気になるところだ。会期中は、公民館横で農家の方々に野菜を売っていただいたのも好評だった。特産「梅谷の大根」は、美味しかった。



ここは梅谷公民館。いつもは人間が集まるこの場所に、今日は動物たちが集まって大きな手帳を開いてモゾモゾ会議中。
先日オグロヌーさん達が大移動してきました。
先月の議論の結果、サルの皆さんは銭湯が半額となりました。
今月末にトラダンス大会が開催されますので草食動物の皆さんは避難してください。
さあ、皆さんも動物になりきってどうぶつ手帳を自由にめくってみてください！

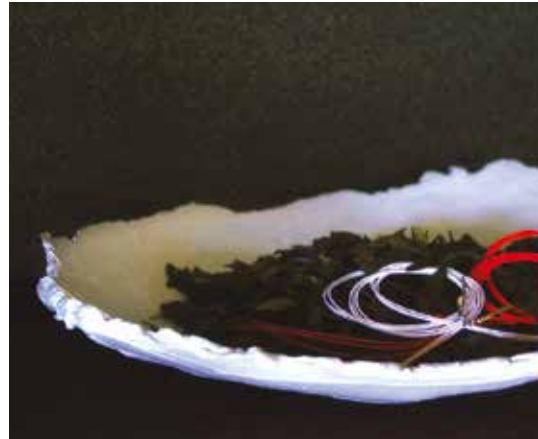


14歳になったころ、お母さんがまた再婚して地元の中學に戻るようになって…。付き合ってた彼氏に「20歳のオマエが想像できない」みたいなこといわれてショック…。もお、まわりの仲間はすっごく大人っぽくなってたし、私ひとり違う景色見てるような気がしてた。でもずっと一緒だった大親友のおかげで、オシャレに目覚めたりして、網タイツはセクシーでカッコイイ～みたいな今は生きてて一番の幸せな気持ちでいっぱい！なんか女の子ってそんな感じするじゃない！？



松原邸 ■ 上粕エリア

上粕(かみこま)の環濠集落(かנגょうしゅうらく)内にあり、上粕小学校南側に位置する。当家に伝わる家相図『松原小藤次改正新宅地図』には明治三十四年と記され、この頃から建築を始めたと考えられる。長屋門と土塀はさらに古い時代のもの。松原小藤次氏は、富豪ながら華美なものは好まず隠れた中にも品の良さを求める方で、柱一本から全国を探し回ったという。ガラス戸より雨戸が内側にあることなどから、のちに増築されたと思われる部分もある。おくどさんや箱階段、長い廊下など、当時の生活をうかがい知るのがそのまま残る日本家屋、使わせていただいた意義は大きい。松原邸はこれが初めての一般公開だった。



「ハレとケ」のハレ(晴れ)は特別な日、ケ(曇)はふだんの生活である「日常」を表しています。松原邸の日常にはいろんな金魚たちが暮らしていました。そして、床の間ではたくさんの晴れの日があった事を想像しうれしい気持ちになります。あなたにとって最近の晴れの日はどんな事でしたか？ たくさんお祝いしましたか？



いのちのぬくもりを感じる和紙、見るたびに違う表情を見せる墨。土から生まれ、土へと還る、受け継がれるいのちの営みをテーマに制作してきました。今回の作品は、「木津川の流れ」をテーマに展開。紙の重なり、にじみやたまり、コラージュなどのさまざまな墨の表現方法を用いた作品は、部屋に入ってくる風や光によって刻々と変化します。静と動、光と影が生み出す紙と墨のさまざまな表情に、いのちの育み、多くの人々の人生や思いを受け継ぎ、時空を超えて脈々と流れゆく「木津川の流れ」に重ね合わせて表現しました。